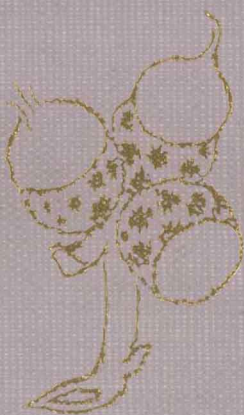


堀辰雄全集

第三卷



堀辰雄全集

第三卷

筑摩書房

堀辰雄全集第三卷

昭和五十二年十一月三十日初版第一刷發行
昭和五十六年五月三十日初版第二刷發行

著 者 堀 辰 雄

發行者 布川角左衛門

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

郵便番號 一〇一—一九一

電話 東京(31)七六五(營業)

東京(24)六七二(編集)

振替 東京 六一四一二三

印刷 株式會社精興社
製本 鈴木製本株式會社

Printed in Japan

0395—70103—4604

亂丁・落丁本の場合は，御面倒ですが小社讀者係宛御送附
下さい。送料小社負擔にてお取替えいたします。

目次

小品

手紙……………	五
匈奴の森など……………	一七
雉子日記……………	三二
雉子日記……………	三三
續雉子日記……………	三九
ノオト……………	四三
山の家にて……………	四四
卜居……………	四六
雨後……………	五〇
山日記 その一……………	五二
山日記 その二……………	五七
七つの手紙……………	五九
木の十字架……………	七七

四葉の首蓓 六

大和路・信濃路 一〇一

樹下 一〇二

十月 一〇七

古墳 一三六

斑雪 一四八

辛夷の花 一六二

淨瑠璃寺の春 一七〇

櫓の上にて 一七五

「死者の書」 一八

雪の上の足跡 一九

エッセイ

詩人も計算する 一〇一

レエモン ラジイゲ 二〇

室生さんへの手紙	二二七
小説のことなど	二二四
更級日記など	二三五
ヴェランダにて	二三六
春日遅々	二四七
伊勢物語など	二五五
若菜の巻など	二六一
黒髪山	二六七
姨捨記	二七四
萩原朔太郎	二八四
「古代感愛集」讀後	二九四
狐の手套	三〇七
一 (ボオル・モオランの「タンドル・ストック」)	三〇八
二 (芥川龍之介の書翰に就いて)	三三三
三 (アンデルゼンの「即興詩人」)	三三六

四	色褪せた書簡箋に	三九
五	「文藝林泉」讀後	三四
六	クロオデルの「能」	三九
七	ハイネが何處かで	三三
八	<i>Ombra di Venezia</i>	三七
九	ゲエテの「冬のハルツに旅す」	四〇
五つの書物		
	「鐵集」.....	四六
	「貝の穴に河童がゐる」.....	四七
	「馬車」.....	四八
	「繪本」.....	四九
	「神々のへど」.....	五三
	マルセル・プルウスト	五七
	プルウスト雜記	五八
	文學的散歩	五九

續ブルウスト雜記	三六四
フローラとフォーナ	四〇〇
ブルウストの文體について	四〇四
リルケ雜記	四二一
「マルテ・ロオリッツ・ブリッゲの手記」から	四二三
巴里の手紙	四二六
日時計の天使	四四四
或女友達への手紙	四五〇
リルケ書翰（ロダン宛）	四五七
「旗手クリストフ・リルケの愛と死の歌」	四五九
夢	四六一
冬	四六四
「鎮魂曲」	四六六
トレドの風景	四七一
詩集「窓」	四七三

「マルテの手記」	四八三
或外國の公園で	四八五
一挿話	四八八
心の仕事を	四九二
窓	四九五
ノオト	五〇四
モオリス・ド・ゲラン	五〇六
さらにふたたび	五〇九
旗手クリストフ・リルケ抄	五二〇
ドゥイノ悲歌	五二八
ジャム、君の家は	五三五
リルケ年譜	五三八
校異	五五一
解題	六九五

堀辰雄全集第三卷

小品

手紙

（「美しい村」ノオト）

一 丸岡明に

一九三三年六月二十日、K村にて

こつちへ來てから、もう二十日になる。それなのに、まだ何も仕事をしないで、散歩ばかりしてゐる。この頃の散歩道としては、あのM病院の向うの、小川に沿つた一本道がそれはいい。アカシアの花がいま眞つ盛りだ。何ともかんと云へぬ好い香りがして、その下を歩いてゐるとぞくぞくしてくるくらゐだ。そこでM博士らしいものを見かける。いつもパイプをくはへて、生牆（病院の裏）の方へ身をこごめながら、注意深さうにその枝などを調べてゐる。野薔薇が一めに蕾をつけてゐるんだ。いまにも咲きさうだ。今朝も、そこへ行きがけに、まだ釘づけになつてゐる教會の前を通つたら、私の知らぬ間に、眞つ白な花を咲かしてゐる、大きな木が二三本あるのに始めて氣がついた。そしてその花が風もないのにぼたりぼたりと散つてゐる下で、村の子供たちがバスケットボールをやつてゐるところは、さながら一枚の繪はがきだつた。しばらく僕は立ち止つて見とれてゐたが、そのうち男の子の一人がするするとその木に登つていつた。すると木の下から他の子供が「嗅いでみなア……いい匂がするぜ」と叫んだので、その木の上の子供は手をのばして、花を捲りとつて、それを鼻へもつて

いつたが、「ウェツ、臭え……」と言ふなり、その花を木の下の子供へ投げつけた。僕は僕の足もとに落ちてゐたその白い花を、拾はうとしかけたところだったが、それを聞いたので止めた。なんだか本當に臭さうな氣がしたもんだから。一體、あれは何んといふ花なのかしらん？

昨日もこんなことがあつた。夕暮、ぶらつとベルヴェデールの丘の方へ行つたんだ。すると、どうだい、そんな人つ子ひとりゐない山の中を、猫が一びき、のそりのそり歩いてゐるぢやないか。しかし僕がもつとびつくりしたのは、ときどきその猫に向つて、何處からともなく、すうつと音もなく飛んできては、その背中を掠めるやうにして過ぎ去る、一羽の大きな鳥（どうも鷹らしい）がゐることだ。すぐ見えなくなつたかと思ふと、また反對の方から、すうつと飛んできては、その猫に襲ひかかつてゐる。がそれより早く、猫の方でも、きつと身構へて、その鳥に挑むやうな恰好をするんだ。ちよつとでも油斷をしたら、猫はひとたまりもなかつたんだらうね。どうなることかと僕ははらはらしてゐたが、そのうち猫は近所の空別莊の庭の中へ這入つてしまひ、それきりその鷹らしいものも姿を消してしまつたけれど、ちよつと妻かつたぜ。——おまけに、歸り途には、ひどい夕立に逢つたつけ。手近い空別莊のヴェランダに駈けこんで雨やみをしてゐたら、すつかり日が暮れてしまつた。大いに心細かつたが、なかなか面白かつた。こんな山暮らしをしてゐると、小説のやうな俗な仕事にとりかかる興味がますます無くなりさうだ。金でも來たら、氣持を換へにN湖へでも二三日行つて來ようかなと思つてゐる。「アミエルの日記」でも持つていつて讀みたいのだが、君のところへ原書は無いから。無かつたらどんな版でもいいから、一部買つて送つてくれないか。この間、頼んだ「エルテル」と一緒に送つてくれると仕合はせだ。なるべく早い方がいいぜ。これから僕は晝寝だ。……